

大石高典著

『民族境界の歴史生態学 ——カメルーンに生きる農耕民と狩猟採 集民』

京都大学学術出版会、2016 年、3,700 円＋税、264 頁

高倉浩樹

カメルーンの熱帯雨林に暮らす狩猟採集民バカ・ピグミー（以下、ピグミー）と農耕民バクウェレの生業と社会に関わる民族誌的研究である。歴史的な背景を踏まえて、両民族の森林資源の利用法や現金経済の導入に伴うピグミーの周縁化が論じられている。なかでも興味深いのは、バクウェレが、村内でのめ事や緊張緩和・休暇として森のなかに漁労キャンプを作る描写である。農耕民であるにもかかわらず、バクウェレはいわば平等主義的で狩猟採集民的な行動をとっているからである。著者はさらに民族境界がなぜ維持されてきたのかを考察するのであった。

本書は、博士論文をもとにした著作である。とはいっても、相当に手を入れたのだと思うが、硬い文体ではなく、たいへんわかりやすい文章となっている。また著者の体験を主観的に綴った様々なテーマのエッセイもちりばめられており、読み物としても面白い。人類学や地域研究を学ぶ大学学部生の課題図書として用いることもできるだろう。

目次構成は以下の通り。

- 序 章 「揺れる境界——自然・生業・社会のねじれ」
- 第一章 「ドンゴ村へ」
- 第二章 「『原生林』のなかの近代——廃村の歴史生態学」
- 第三章 「森の『バカンス』——二つの社会的モード」
- 第四章 「『ゴリラ人間』と『人間ゴリラ』——人間＝動物関係と民族間関係の交錯と混淆」
- 第五章 「バカ・ピグミーによる換金作物栽培と民族間関係」
- 第六章 「嗜好品が語る社会変化——精霊儀礼からディスコへ」
- 第七章 「周縁化されるバカ・ピグミー——森のなかのミクロな土地収奪」
- 終 章 「開かれた境界——自然・生業・社会の広がり」

上記の他にエッセイが7つあり、それぞれの章が終わる毎に挿入されている。こうして目次を一覧すると、本書はピグミーとバクウェレの社会変化を扱っていることがわかる。序章・第一章を読むと、カメルーンの森で数多くの日本の人類学者が調査研究を実施していること、その蓄積が膨大であることに驚かされる。この地域では、民族境界というテーマは、古くから論じられてきた。その端は、コリン・タンプルの古典的民族誌『森の民』で提示された狩猟採集民と農耕民の二項対立的なあり方である。その後、日本人人類学者はむしろ生態学的共生という観点から解明してきたが、著者はその成果を認めつつも、歴史的視点や外部社会との関係の考察が希薄であるという点を問題視した。そしてグローバル化がすすむ現代にあつて、狩猟採集民もまた農耕を行い始めているにもかかわらず、なぜ彼らの社会では平等主義が維持され、そして農耕民との境界は明確なのか？という問いに至った。

理論的にはこの問いへの回答は容易である。生業と社会は一元的対応をしないからである。例えば縄文時代に農耕があつても、それは農耕社会とはならず、弥生時代こそが富の蓄積と社会的分業を骨子とする農耕社会が出現したと見なすということである。農耕を行うようになった狩猟採集民が、そのまま狩猟採集社会を維持するのか、それとも農耕社会になるのかは様々な条件が左右する。

とはいえ本書の面白さの一つは、その条件の一つの様態を具体的に記述しながら、なぜ狩猟採集民が農耕化しないのかを論証している点である。ピグミーは、カカオ豆の栽培を行うようになった。その歴史的背景も探っている。関心を引いたのは、著者が放棄されたピグミーの集落を考古学的に調査し、そこからカカオ栽培やゴム採集の痕跡を発見した点である。人類学者の調査は、廃村でも可能だということを評者は学んだ。原生林に一見みえる森林の至る所に、人為的な行為に由来する地形と植生が成り立っており、考古学的調査の目的は森の利用の歴史を明らかにすることだったのである。

一方でピグミーの行動倫理が、一部は変わりつつあるとはいえ、平等主義的で即時的な富の消費原則によって貫かれていることは、現代世界にあつてはむしろ悲劇をもたらしているようである。なぜならそれゆえに彼らは富を蓄積できないからだ。長期間にわたる土地保有の仕組みを彼らが発達させなかったことも、ピグミーが、現在のカメルーン国家のなかで周縁化される理由でもある。

評者はアフリカ熱帯雨林の生態人類学的研究について詳らかではないが、本書の価値はこのピグミーと対峙する農耕民バクウェレについても民族誌的研究を掘り下げた点にあると思う。冒頭でも述べたが、彼らは日常のなかで、森へ漁労キャンプに行くことを「バカンスに行く」と表現し、親しい仲間や恋人、家族と連れだって一定期間村を離れることが習慣化されている。その理由は社会的緊張をほぐすためらしい。しかし注意したいのは、その時に食される物が、農耕民が馬鹿にする狩猟採集民と同じものであり、それら森の食べ物を食する時には、人間関係もまた平等主義的で開放的なモードに変わるというのである。しかしこのバカンスはあくまで過渡的という点が肝要である。もし彼らがそこに長期間暮らすのであれば、少人数であつても家屋を建て、森を切り開き、村としての秩序を構築するからである。農耕社会のなかに、日常とは異なる社会秩序と倫理がある——それは

通過儀礼であるならよく見られることであるが、生態環境を移動させることで、反転を実践するというのが新鮮だった。

評者にとって少し物足りなかったのは、この習慣のもつ意義が、環境適応の人類史あるいは進化生態学的な観点で考察されていなかったことである。農耕民のバカンスは生態学的にどのような意味をもつのか、人類の環境適応の理論に貢献するような考察ができたのではないかと思った。

とても刺激的だったのは、異なる民族をゴリラと見なす民族観に関わる第四章の考察である。それは次のようなことである。ピグミーは農耕民をゴリラと見なしている。そして人間としての農耕民の姿は仮の姿で、死ぬと本来のゴリラの姿に戻る。ピグミーの死者もまた森のどこかで生活を続ける。一方、農耕民の方はといえば、ピグミーを半人間半動物と見なしている。これらは死後動物化理論と呼ばれ、コンゴ盆地でひろく分布しているという。評者は北米やユーラシア北方の狩猟採集民に見られる始原的同一性＝動物はヒトであるという議論を想起したし、また本章で記されているゴリラの狩猟にまつわる話も興味深かった。しかしなんといっても、ゴリラと人間の境界が生死あるいは民族アイデンティティを通して相互反転する点が面白かった。要するに、ピグミーからみるとバクウェレは、ゴリラを通して自民族にもまた異民族にもなりうる存在だということである。こうしてみると結局のところピグミーとバクウェレは同一だという議論も可能なのでは？と思ってしまった。そしてこの議論は本書のテーマである民族境界に関わる。しかしながら、著者はその議論を避けており、このことは評者にとっては不満であった。先の森のバカンスの進化生態学的意義を踏まえて、ピグミーとバクウェレの両者にとって森そしてゴリラさらに異民族とはどのような存在なのか、環境利用に加えて、観念的世界としてもより深い洞察が可能だったのでは、と思った。

以上、内容を紹介しながらその魅力と批判を述べてきた。最後に、本書の醍醐味の一つであるエッセイの可能性に触れておきたい。俳句があつたり、お茶の飲み方などが紹介されたり、現地の生活のリズムがよく見えてくる。そのなかでエッセイ5の「病がもたらす想像力」は、マラリアに罹患したときの著者の体験談で秀逸である。マラリアにかかったときの幻覚が記述され、そこからアフリカの神話や民話に見られる超常現象が、より具体的な実感をもてるようになったと著者は述べており、とてもリアルな読後感をもった。これらを読んでいると、異文化の理解は、学術的＝論理的な記述はもちろんのことだが、もう一方で、人類学者の体験もまた重要だとあらためて感じた。それは感情だったり体感だったりする領域であり、この点で人類学者の身体は、調査地と母国の間をつなぐ媒体になりうるのである。